さいたま市立宮原小学校
学校だより
令和7年2月28日　第13号

学校教育目標　心身ともに健やかで主体的に生きる子どもの育成
・たがいに努める子（やる気）・たがいにきたえる子（元気）・たがいに手をとる子（勇気）

ふるさと　宮原

井　上　　雅　史

今年度の登校日も残すところ17日となりました。6年生は15日後には卒業式を迎えます。令和6年度の1年間、保護者・地域の皆様には本校の教育活動に対し深いご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

また、昨年末に実施しました学校評価アンケートでは、保護者の皆様にはお忙しい中ご協力いただきありがとうございました。多くいただいた肯定的評価によって、教育活動を更に推進していくエネルギーをいただきました。併せて、課題としてご指摘いただいた内容につきましては、真摯に受け止め、校内でしっかりと検討し、今後の学校運営の工夫改善に活かしてまいります。（アンケート結果につきましては改めて別紙にてご報告いたします。）

さて、学校の3月という時季は、上級生から下級生への様々な引継ぎが行われ、形だけでなく、気持ちの面でもバトンタッチを行いながら、自分の成長を実感できる時季です。また、自分の成長を支えてくれた人々やお世話になった人々に、様々な形で感謝の気持ちを表す時季でもあります。

わずか数年前、新型コロナウィルス感染症拡大防止のために様々な行事が中止となり、子どもたちは、いつも通りにバトンタッチをしたり感謝を伝えたりすることができなくなっていました。その時の1年生が今の6年生です。コロナ禍で過ごした小学校生活は、多くの部分で上級生の姿から学ぶという形での引継ぎを受けられませんでした。たくさん我慢もしました。しかし、多くの苦労や葛藤を乗り越えながら力を付け、今、上級生として立派に頼もしく成長し、卒業に向けてまとめの活動に取り組んでいます。1年生から5年生の在校生はそのような卒業生から宮原小の伝統を引き継ぎ、4月にはひと回り成長して新たな一歩を踏み出します。

皆さんは「高野辰之」という方をご存じでしょうか。名前をご存じなくても、彼の作品を知らない方は少ないと思います。6年生の音楽の教科書に載っている「ふるさと」を作詞した、長野県永江村(現中野市)出身の国文学者です。私は、17年ほど前に長野市で乗ったタクシーの運転手さんに「高野辰之記念館」の存在を教えていただきました。この記念館の周りの里山の風景が「ふるさと」の舞台といわれています。その存在を知ってから、6年生の「ふるさと」の(音楽の)授業をする前に、「ふるさと」の原風景を実際に肌で感じ、「ふるさと」の風景を目に焼き付け、歌詞に込められた気持ちを感じ取りたいと思い、何度かここを訪れています。この記念館のある中野市永江の豊かな自然の中で育った高野辰之は、学校を卒業し地元の小学校の代用教員になりました。しかし、研究への情熱が冷めず、教師を辞め、今の信州大学へ入学。そして26歳の時、家族を残して上京し研究に没頭します。その後、国語や唱歌の教科書の編纂、日本歌謡史や日本演劇史の研究などで多くの実績を残します。決して順風満帆とは言えない彼の人生でしたが、諦めず自分の信じた道を突き進み、故郷に錦を飾った彼の一生は、まさにこの「ふるさと」の歌詞そのものです。

1
うさぎ追いし　かの山
こぶな釣りし　かの川
夢は今も　めぐりて、
忘れがたき　ふるさと

2
いかに　います　父母
つつがなしや　友がき
雨に風に　つけても
思いいずる　ふるさと

3
こころざしを　はたして
いつの日にか　帰らん
山は青き　ふるさと

子どもたちにとっては、ここ宮原が「ふるさと」です。小学生時代の思い出を大人になるまで覚えていることは少ないかもしれません。でも、毎日通い先生や友達と過ごしながら色々な経験を積み重ねたこの宮原小の思い出が、これからの人生の糧となり、やる気と勇気のもとになることを願っています。すべての児童が胸を張って前に進めるよう、我々教職員も全力で児童に寄り添い、指導に努めてまいります。